

[illegible]

よきしのみ

甲子年十一月

蘇室久安述

枯野の一

晋子あかき尾花の序め

蘇室久安述

旅ふ病く夢を枯野をわけ廻る

また枯野哉をくちゆめやもせむや車
されしこれさへ妄執なぐ風雅の上ふ死ん
身の道を切ふおろふあまや悔すれは日の
夜乃吟也云云十二日の申元刻をうりふ

元禄七年十月十二日

芭蕉翁文集之中俳諧教示の詞

予の風雅と其爐冬扇のぶや——衆ふけの
ひく用る所を——たゞ釋阿西行の詞のみなり
初めいひらゝされ——あだもるたをうれと
おもふもたれやとるおほ——

後鳥羽上皇のかせたまひ——はれやのいそ
ららうたたまふとや——あまうきものいそなり
浅きうやのいそひ侍る——やうやとれど此
みちやけをさうとや——其ほそきしちかきま

あまうき——ちやうとさうきとる古人のあまうき
もとるは古人れりやめたるあまもあまや
南山大師の華れ道やも見えとる風雅も
またこれやおおなり——いひく灯をさうびく
柴門の外みわくきくわくはのみ

芭蕉談下卷

わが俳諧と前句の心哉知く孫をうけはあち
一句のうへ物ふ感合は物の情をけぐり知ては
ひそほりあはれなり——

狀三章の味ハ俳諧地の風情なるを以て
一正風傳やいふ事をおりふ晋子が枯尾花
の序み隠さうぬたれ身を竹井ふ似たる
うねや風の吟行ふ猶く徳化く正風の
師や仰き侍るなりやあれど門人より正風
や唱ふれとらあるなるを狀傳翁の書給
ひしものや桃青書やあれど杜枝より
正風傳や申されくよりさむぐ小枝
またくのひをもくくへられく杜枝

傳や申されく我もくもなるべし
く翁傳を書たまるもあを野
風傳やも名付られく晒落なるべし
予が俳諧と其爐冬翁のくやあるを
見て志れ居るを

一傳中ふ翁の俳諧ハ萬葉の意なりとある
翁ハ釋阿西行の道より入るやあるをみね
萬葉の意やそれと甚誤なり其風雅乃
より免はくやそれなるを

一傳中ふ江上の一路ふあそびやうふとあり
其の向上たるべき浅江上よりわづらひ普通
の誤りたるを又真如の月を觀むる裏
の花をも尋ねるやあそびは皆禪家の
見性の事あり達磨大師も九年の面壁を
ちかひきく甚む浅うきふは浅う
風雅を四時の風景ふ其身浅養ふものや
あれど病未期の病中までも枯野のさへ
浅きひまひや坐禪入定やうふ

たがふる

ある人曰丈艸法師の青山白雲ややと
是は年々悟道たるを答ふ言語の俳
諧ふあそびの俳諧たるやうき處より
青山白雲の更しく来たるやうき俳諧
付肌の一分れうへりのお感合を及所理を
そは言語絶たるを禪家の問答より
あそびは青山白雲を正秀への三十棒也
そはそを浅談を見く味ひたるやう

秋正風傳て書元東北枝の書多し
ものもあつてやおほくぬ見れ
人に見ふより後

われの二

芭蕉翁文集

許六小離別の辞

水曾路を經く舊里へ歸る人々森川氏許六
やう古くへと風雅な情あはれ人々後小
笈をうけ草鞋み足越いゝゆゑ破笠小霜露を
いゝやうに已る心をせむく物の實を志れと
よ海あふると今仕官おほやけの爲め長劍を腰
みかけ乗掛のうへろふ鎗をもこせ歩行若

黨の思き羽織のゆひ枝を風へひるが身
ふれ有さゆ妖人の本意めをあらねど
椎の花れゝろみも似し木芽の旅
うに人れ旅めもなへ人木芽れ蠅
正風傳ふ上雲上より下土民もなへ
づきり休なる唐明の豪傑も恥れ
ちやあけなく北枝のわささ
のどらねりのやを異形に

芭蕉談

曲翠同發句を取あけ免集作歌やいなる妖
道の執心たるを翁曰是いやとて
我上手なるや志しんや我を忘れたる名聞
よと出於事なり集やと其風躰の句を撰
ひ我躰やいそと我志しんや我能諧
撰集のころちや志しんや貞徳以来其
人々の風躰あやと宗因も俳諧をや
来きり志しんや我云所の俳諧と其俳諧
異なるやいそと荷兮野水も後見し

冬の日春は日あけ等あり越人瓢集あきて数
句も数百はくぬたりきりれどもあつむに
句あり出たる句なきゆゑふ巻まであり
ちりりきりきりきりきりきりきりきり
今の一變正風なりきりきりきりきり
ふ我々もあつむに満足なり
侍らるる満足なり 東武へ久しく居る志免たる地あり
書りしなり 孤屋野坡の志きりきりきりきり
昔ふきりきりきりきりきりきりきり
素龍ふゆづりきりきりきりきり

はるきりきりきりきりきりきりきり
炭俵集 今度土芳半残の生國の侍習は
機なりきりきりきりきりきりきりきり
せんや機なりきりきりきりきりきりきり
巻なりきりきりきりきりきりきりきり
心なりきりきりきりきりきりきりきり
思ひ立たりきりきりきりきりきりきり
集ふ贈らんと思ひ侍る巻あり今度曲翠亭
の巻あり彼是四五巻なりきりきりきり
申置侍れきりきりきりきりきりきり

ほづの小冊を以て今一ツと集む其風躰を撰む
ものひめ合體を以て今一ツと集む

萬葉集を以て先廿一代集の時の世の氣稟ふ
まゝとせたる風躰也夫故古今新古今
代々の風躰をあらうと欲也然頃めく御撰ひをま
は其風躰のゆゑとすはれ故也やまをあらうべかり
やと集むと云べしはれ歌のことはるるに
いふ事なとて俳諧やても同徹あらべしとふ
貞室の玉海集の如き玉丸の如けのまゝとせたる

米舂砂のまゝとせし有難無難のあつめ書也
人の句いりし集めたるまゝとて我らのむ一瞬
極らむ何と云ふ風躰やせむたふ我も集作あり
や名聞の雅なるを秋類あまたあらべしゆめく
貞室を誂謗せしふあらは人のうへを以て教る
二子に示したるを問ふとて撰者は非分明と
ぞとて是れなり夫をあらきやといふるや箱
曰其人のたけ分はるおかし位の句をよとておもしろ
つれもあらむ夫をよとておもしろとて

うづ波うづぬや杉もふ句ううねる——上品乃
句ううねるうぬゆゑもよううぬや捨へ津
浦々遠境波濤の限に貫ひあはれうう句う
うううううううううう集と云へううや我
家の俳諧乃一舢の姿ゆ——我ゆめ應どけを
句う一句ものをば曠野集に貞室宗因等の句
をのせもねる我家の俳諧の舢をねるねる
ちがや——きり俳諧に但言ちがゆえり文盲
愚昧の者もやくはあうう自己に俳諧を志す

やみり者の多く出来侍らむ衆俗の今日あはれ
何うもまへむかへいふやう他乃人をいふ
しむらあはれ我家の俳諧をううん為也
穴賢口をうううう事なれや怒おけうう
正風傳ふ句う四海にあはれううと無下
いふれ——うううう異なり

一貫書——あはれうう事なれや美しゆき
不申候翁の病床に給仕——侍る時問家の集を
見るへうう冬春あはれ野猿うのもねるや俳諧の

たまひみちなるを歌書といふはさうさう
うるべや翁の曰何めども耳にふるを
我家の俳諧み求め得たる所をもやむやも王
もらうあゝ口もぬせんやむねもふなるは
其故を古への歌人乃哥書浅手本に歌詠
たる人なり其時代々の風を考へ其風を我
もわやて歌よみたるや思ふにあり夫故に
一家をたぐるも古人のあやをさすはる哥よみ
をわける人といふまでも馬あゝ生涯我歌よみ

句数を好むし
云云然れども其
前より初心より
上達まで歌書
又ハ物語等を交
るゝとて書き
て見る一書を
読んで心よむむ
きと得て句数
とちりたるふ
まゝとてたふ
句数を好む人
きりめて狂を生
まへ源氏雨夜
の物語も青む
人の顔でたふ
はるやそれの
教へる如く能

人なりやわたりて我家の俳諧をすむるや
あはれなるにも狂はるるを初心より上達
まで哥書又ハ物語等といふはさうさう
見渡して家の風を失はれむ句数を好む

以上

十月八日

舍羅謹書

野坡物語

正風傳ハ初心のうらゝ句数をこけみ夫より
姿情をわく大山を越むるの麓へをゆる

諸と相撲聚た
いしく見替
く侍る

處を案次する——云又わが時代を
考ふべし——やういふ類の文章よるに
みえりや——あはれやういふはあ
まじき哉——たゞういふは思ふべし

うたがひの三

正風傳曰心高き故に邪路入安んじくは
古人の胸中浅見なりとあるは、
あやうきもは、
みづから——夫を先いふんや、
勝心ありて邪路入る——
うん氣りの我慢の事、
慢より人ふし、
兒をうけしる百人一首をうけしる

まゝの翁の志をひ給ふ釋阿入道西行法師の
道をや千載集や俊成卿の撰みたる所たる則自
判の加茂社歌合や沙弥釋阿や書多しや
新古今集や西行上人の歌專なる集なりされば
これ等の集や皆其頃の風体備たるを感嘆し
註ハ八代集抄季吟法印の著書やこれ翁の師
たる宗匠たる也俳諧もよくある註釋あり
山家集や西行上人の歌集たる其角もこれ
得る翁の骨髓ふたふたやありやこれ世の

宗匠達たるをあらざるべし一秋内雅詞
俳詞の差別よく考ふべし又心ひくたや
糸を欲心あるも古人の胸中を志す事あた
むやあらまた一無欲あるも故に静なり欲
あるも心もひく古人の胸中をうへる事あ
たふはるたる傳中か向上一路ふあらざる
心裏の花をも尋ね真如の月を觀みべしと
丈艸法師の青山白雲やいふ事皆欲をこら
方便たる欲心捨たる人ふけりふゆる真如乃

月心裏の花青山白雲向上の一路やうりもの
ち―禪ふさふさの如くも儲欲ひやう別
捨るものやうのち―不義をくむさうけ
ふこや那う是はほの事や

神國のあらうといはれども此世にせはる俗人
婦女子あつて皆よく志す事なれども西や
まぐれいそめん人を深く心得てやうあるを
翁、これに慎み給ひ―ゆゑ末期すべし枯野の夢
みんれ風雅やうは―生涯山野を樂へるや

ぞたや―是は學ぶ者―これを慕ふべし

芭蕉談

戀句の所み翁曰

古六悲の句数
定らぬ 數後
二句以上考と
なる予二句は
捨る云祖師氣
魄の大なること
妖童を以て可
知なり

連歌の上をかくいふと恐むあれふ似あれども其
連歌の事や俳諧の上ふあれを背き奉る
めもあはれ然やも我古人の罪人たる事をま
ぬられども後學の作―ようらんことを思ひ
侍るもの云

同書み

格へ中むの

中昔ハ千載集
新古今の頃より

俳諧ふひと連歌を

輕めく去きらしむ安く候やあり哉とるたぐへ
格ありもれやねるるもつて誤りなぐへ

うけくやつらきみきたるむ紅葉

清膳がよひやまけりせのふ

ふれ一段や翁の俳諧を見く志るる
ふれの掉なきづこや飛鳥のあやうに如く
蕉門にあらざるたれ所なる何ぞ格のつ中き
哉用ひんや是蕉門の蕉門やそれ所なれば能々

味ひく志るるに事なく言語のねむり
みあうけりなり

傳ふ格の出入をいふのうみださひふこと
といふなり

是蕉門の無格へ翁在世此時やても本來凡兆がけ
ざる處獨丈草是を得たる飲翁遷化の後又これをい
人をくれば蕉門の無格へ是蕉室が宗旨也其詞曰蕉風
無格調詞和平

蕉風無格なり春の句小秋の句附るもはきめれ
よらん無格へ只作の志やけき為なり調詞の和平お
らん事を要せり

蕉風無格調詞和平附意の全躰に意無きもの物と
感激も黙々々々悟入せる民化の一助なり

かき野の四

ひや日禅僧来つる予がかれ野を見つゝ
笑ふゝゝ愚僧も俳諧をうのみゝゝやわら
翁の真面目も禅心をうれ尾花の序めも開禅
の法師やあふれたまふゝゝあきつゝやわら
向上一路心裏の花真如の月青山白雲等の意はあき
もれ如くいひなゝゝ只山水の樂ゝみをむねふ書
きゝゝ大なるたふひあるやゝ予あつゝむゝゝ
き禅道と我をらばゝやゝゝゝみか問答ゝそれ

佛法の末期の一念大切なるより義理ぬきつる
其末期のつらき夢いふれ野をのけまはるるつら
みても大涅槃み入るつらみのなきや僧がいつく
是よりつらきつらきつらきや笑ふれども此久き
や一月翁を禪心とせし來る其所を何とぞ
あれど徳をうけしつらきつらきつらきつらき
釋阿の佛心なりとの釋阿西行の道を書き禪
心をうけしつらきつらきつらきつらきつらき
是ふ似く甚難なる釋阿西行の歌ふまじやある

風雅の心もむきなりとてたゞへで萬葉を慕ふ
人の萬葉の古へのけまをうけし古今をよみ人の
紀氏のあやみきとてつらきつらきつらきつらき
みきなりとてつらきつらきつらきつらきつらき
猿の心を好むのつらきつらきつらきつらきつらき
俵の調をうけし風雅のつらきつらきつらきつらき
つらきつらき僧曰つらきつらきつらきつらきつらき
心をうけしつらきつらきつらきつらきつらきつらき
柴門の辞め君子と多能を恥やいふれつらきつらき

あれが翁の心を僧にうつされしやうれまじくたゞ風
雅ひやうく山水旅泊の樂しみをたぐへ事うを
とぞ三體詩の序ふ以吾朱文公之學而較之則
又有向上工夫而文公詩未易可窺測者也といふ
朱文公禪を學びしやう故みよの向上の字あり
文公ひや度禪を學ぶといふも聖人の境をも人故
み聖人の學者也翁もひや度禪を學びしやうや
いふも風雅の本心をたぐ故ふ風雅心やゆゑふ山水
旅泊の風雅や云ふ非あるやや僧然とやいふの

うれ野の五

ひや日俳諧師來たるといふうれのを見侍り
て禪心風雅心の同答い先はるころもやうや
俳諧宗匠みち千載新古今山家集等城志するや
叶ふべしやういふれい甚非なる今翁の道出果
て侍しを何ぞ他の宗旨の歌の道をうけしや我
翁の俳諧のうへめくこやたうぬるきものを依乃
和歌此道を横領するはなれきんをたぐへ予
いふ其を論もたうめはういふ此事をいふは

うねるも歌よと連歌よく連歌より俳諧いづ
其源を尋ねるもとて翁面前めども門人より問ふ
詞あり既ふいふ如く俳諧の心得ありてる歌
書らば此を見ざるべしやいふはばきめども
しやとねられ侍り予いふもさるに翁の志を
給ふ釋阿西行をいつたる夫より氣力めどもや
萬葉古今をも見るもふとてさるれを翁の口め
衆俗やとらね風趣とらなるべし俳師又さ
やとらねた御家の御俳諧ありとね上雲上や

かきし北枝の詞尤なるを何ゆゑお翁へ上雲上や
書たるもさるやいふもさるや予いふ

やとらねた御あたまの事と志ねるもさる様や
翁のみやびひよりと志るもさるやいふ
またとらねた御方めらる野風を吹くもあられ
やとおほしとねたらんやとねた仕官めをねた
りの仕官めめし出けり又面目の如しやめ
あきこやとねた

後水尾上皇松永貞徳と連歌め工なるを聞ゆ

十三朝紀聞

後光明天皇
應三年癸巳九

月之条曰

松永貞徳張字

長頭九彈正久

秀之姪善和歌

受古今於幽齋

藤孝又工連歌

初立花開桐隱

其側後應竟然

親王之微後方

廣南池田里起

恩堂若九屋設

吟花廊于堂屋

之間堂内安子

昂貞蹟法華經

置上宮太子若

援達人九貫

其俳歌を奉りて免多ひつた賞へたまひ俳諧

花の本此称号を賜を呈たうやまわが蕉翁乃

俳諧ハ隱者の幽情閑雅の風致をいねやせし

なれどかろく法式をいねやよくはれあり

やごやちま御方のこれを裁きやまあれ

やまおぼくそて花のもやういふる美称

をもあまはるたふれあるてこれと翁の

本旨を思へていめへ貞徳師ふあまはるなる

称号めくもて里村氏世々やめへ来たるや

之定家紫式部

画像自号柿園

法皇嘗得其諧

歌大奇之賜以

称曰俳諧花本

感激創斯道軌

則為一書名御

傘故世推為諧

歌始祖云遺書

有戴恩記等

翁がむねた隠逸の野風を以萬葉集のうた

かた岡の此むね尾木椎まうをさるれなるの

陰み生むもやいふをたよるて幻住庵の記の奥

小先たのむ椎の木もあま其木立や見えたるが

蕉門めく椎のむねをたよるてたよるなるや

似たりもく本意をうす

推がもやみ捨へをたよるはまてこれ野の夢

見られさるる俳師のいふ

元治元年晩春

芭蕉談小書記

へ焼捨いし書
て後みわ句の

姿い青柳の二
章を簡記より

書一又の書翰
子俳諧示教の

書あり云終
ふ心定まると

る所明らう小
見えより師お

き後愚人の敬
をよりうと人

後世とくも多
うと人

蕉門附句の上
格なき支句

響移位面影よ

正風傳

抄書師倉丸蘭更宗匠とを授玉ひりと寫し侍りたり袖珍抄の
正風傳の抄書を翁の口決ふたりて流布せりもの多し書落たり所多し

一 格ふく格を出さね時いせば一 格ふく

時い邪路ふく一 格入格を出る始て自在

を得るなり

一 詩歌文章を味ひくころを江上の一路小遊む

作を四海ふめりら及なり

無門關 乾峯一路頌曰

未舉歩時先已到未動舌時先說了

直饒著著在機先更須知有向上竅

江上之江字蓋以江向音通誤歟

一千歳不易一時流行

一 他門の句を彩色の如く芭蕉流の句い墨墨画

のころ一 折ふれ彩色なりふくもあはれ心

他門ふくはくはれ志をいし誠毒一や及

一 名人を地をよくやうのやうくふれ心ふく

あやうきふれ妙あま上手を強き所ふれも

一 ころみなり

一 古人の跡をふくば古人のもやふれなりやう

里附肌の優お

りしを要すなり

ありへ一さふ

共立つのもの

皆句をもちたる

うへの表徳

く是を用ひ

句を作らんと

思ふなり只

心の念着とあき

をうと風

雅心よりなり

半く理あり

も所あり

千歳不易の時
おもゆる一時
の流行なりと
丈艸つづと但
丈草法師の翁
よめる人品の
ありたる所
ありやうと
されし翁も丈
草法師ハク
く我門ハ遊
人ありと
へといふ
支ありと

を求めん

一等類作例吟味を

一古書撰集ふ眼を

一を越翁の風流を學ぶ輩ハ先鶴のあゆみの

百韻より冬能日あゝ野深川ひさこ猿の炭俵翁の

文熟覽まへへを句の時代々々を考ふ

一初めのうち句數をこのむ

ち大山を越向ふの簾へおる所を案ずへ六

尺を越へんやちを越へるものも七尺をのぞむ

を越へるやちを越へるものも七尺をのぞむ

古人の胸中流るる事あり

一俳諧の中より以下のものも誤るゝ俗談平話と

のちがえたりやむの翁ハ俗談平話をたゞ

をえりやむを俳諧やむを

ハ浅間ハ翁の俳諧ハ萬葉の意なるを

よる下土民もたゞる道なり唐明の豪傑

めも耻る事なり只心のやきを耻る

一葎句の次女ハ青柳の小雨ふもれたるがく折々微風

翁の句々を見
侍る俳詞ハ
勿論雅詞ハ詩
文の熟字も字
音も万葉詞も
何をきくや
云ふやこれ
用ひるや何
や俗談平話と
たゞのや
らんや俗
談平話より知
らんぬの書
入るや

歌ひてふをそ一てふをは專要たる我國にてふをそ第一たる國
あり則やらん
けけりそめ
しを結ひ
詞の玉緒を悉
しむる切字
あり當やめ
うや淋
何よりとの如

あやめはるもさう——附方へは月夜の夜めうめめや
こやあめほるるが如く竹村をるるぞう琴聲を
きくがう——情へ心裏の花をも尋ね真如の月をも
観るべう口を飛流のめうらふらだうが如くあべう

元禄七年春

北枝

けり得意
のこれる物
ハ皆切字や
四十七字俱ふ
切字あり
一字の置様ふ
うやめ

この正風傳をけり記しぬる志はる
人々志しむるが如くあべ人のもの多う
きく因みふらめ舉げあかん

蘇室

附言

と雜詞の上
明らうあかん
予黒谷の一枚
起請文の聲
をよみ
はき捨
み吹込木の葉
うめを
伴信友の
かうらうはき

以来風雅をたのむ人々の佛如道をと
ちやせぬるやい今の世乃喫茶の如くなるる或は
志ある人のころは城やひらきこれふか
多う里ぬる西行上人や廿三や

出跡ていふ
しをよと直さ
きしを其字
みく引まられ
わり真濁を頼
自らの詠奇を
座右に書つけ
く一月なり
諫調せしめ
とも同侍らぬ
翁も爵族中
秋事あるも
し名人のこ
よと思ひ感
るものぞ

出家まゝぬ其誠意のいたる時なりて空々風雅
みまはりまゝを故おけきけ佛道の能くもあじ
元政法師のこゝきと一流の法則もあやうまゝや
佛法ふいゝ人やいふるを戒の翁をけり
ゆりまゝもあやうた山水花鳥ふ對々幽情
まの危られぬれ此みまの名人なるる佛心の
往々たる樂天の詩乃如くまを中むの
風雅のけまゝやいふ其徳をうけんとく正風
傳ふとけりまゝ禪心を真面目のこゝ唱へ

たゝら却てこゝをせまゝをいふる士朗の
漢學鑿業ふあやう佛の事おほくの危られ
る風雅ふ業まゝをいふる禪心を
真面目やたるは蒼虬梅室卓池の宗匠
もらうと以下みま素門ふ繩をける風雅の
まみやうるいふるや嗚呼枯野の夢後世
の佛法ふくまれ名利をはかり事高きや
いもん 皇國の風雅の枝葉やいふるも外邦
のあやう所ふあはれをまゝるる心わづか

あゝ山水幽静の地ふあゝひく飄々やうゝ
むけもらんそ真卒の味やいもむ歟

蘇室再記

枯野集かきをもへく芭蕉翁を祭る辞

俳祖桃青翁の御霊ふ申し侍る

古池や蛙やびくむ水の音

断除嗜欲想永徹天機障身居萬物中心在萬物上
志もくくら花のうへあり月夜哉

天下元無事勞々我有心相携沙上語山月二更深

文章法師秀逸うゝやうをみきたる村紅葉

の附句や言
詞よのへなき
御膳がよひと松のせのうゝ
文章

言外の意所謂
坐忘あり芭蕉
幻迹有本來達觀無古今長嘯人不聞山風吹蘿襟
談お羽の詞

のうらなれ
一代の才人
狂者とい詠
の奥のこゝ也

昭琴不鼓此間有曲可歌可舞

あがらふ二の月れ吹ちる

こがらふの地も落さぬ時ぬれ

の句評と作や自然との甲乙

妻よふ維のうらたをくを身を細く

風姿の高き山家集の意

馬ふ寐く残夢月遠く春の煙ハ牡牧の詩の熟字

這出と床火庭が志この墓の夢ハ萬葉集の詞

腫物くけらる柳の志ねひう非ハ伴勢物語小藤の

志ねひ三尺六寸むらり出ぬべく此外七部の句々

炭俵ふいぬれまぐ雅詞ハ数うだるもたぐりやま

の古ふ城面影ふあく作里あたまハ博識号

聞情ハ當世ふ通く知里給うぬ所たまふ

君入門の人めをくむく曰

我ふ似をぬくはまらけ真乗瓜

けふも後世俗談平話をたけのみや觸流ハ俳諧

地も俗々くちねる君ハ誤ハ後の世にあらやう成る

君生涯羈旅ハ杜甫詩集山家集観音經をいれ

心地の經の無常觀達——情々山家集や杜五郎を
胸や志たる爰中の遺物み文章本來のよろこび
いづれあれど——則情實のこころやいづれ——を
北枝てふもの己が簡記より出る所をちぎて——書
あ——正風傳やいづれより以來實哉おもふもの
悟道見性ふたれより——佛家の如く——情をねもふ
もれら實哉忘れし——枝葉ふも——れ經の無やいづ
りもの實たる詩歌の情たるをけりし情實のやけ
あ——人世閑を樂しむの教をあらけりや我も

君が誤りも——後生のあやまりも

金籠鎖鸚鵡山木縱班鳩巧拙知誰是天機不自由
君幻住庵のたれみち

小雨閑空齋青々竹映堦道人終日靜一枕到無懷
此意肯あらなるをいづれ——續扶桑隱逸傳ふ入
ち——何——隱逸の唯佛家の——かあ——市中に有るも
名を隠し或隱逸——を——へたるも——後世標良し
やと其情實を行ひたるも——天然の人品のみ是君が
誤る後の世にあらむ——君が頃々深川の菴淋——

水流縦急境常静花落雖頻意自閑

此意旨ありき樂しみながら教示ありけり花々鋪
深川の時乃如くあり君のあや成るるよりこれ
繁華の場所を好める是も君が誤なり後世の
あやまり

君五十年禁戒のため閑閑の説を自書

舞やひくく後あり門の垣

やあけも風雅の爲め禁戒早くより成るる
枯野の夢ふ只山水の真致を娛樂むこれ蕉門の

俳諧たるなりや言聲なりとも風雅なり禪
心も唯ふ蘓室が俳心なりを御霊の御前小質及

元治元年十月十二日

蘓室久安謹書

風雅心

推しもさへにさへあー心ねむやうく
うねむの夢を夢に見るやう

千載集の序に曰く此道を學び深く其意を
けりける輩ははためきむる中ふ松花靡ふの
き若の袂ふたれける物星を構へるあやむき
いふおかし

附意

もれいもく夢ゆるもはるひやうわさ

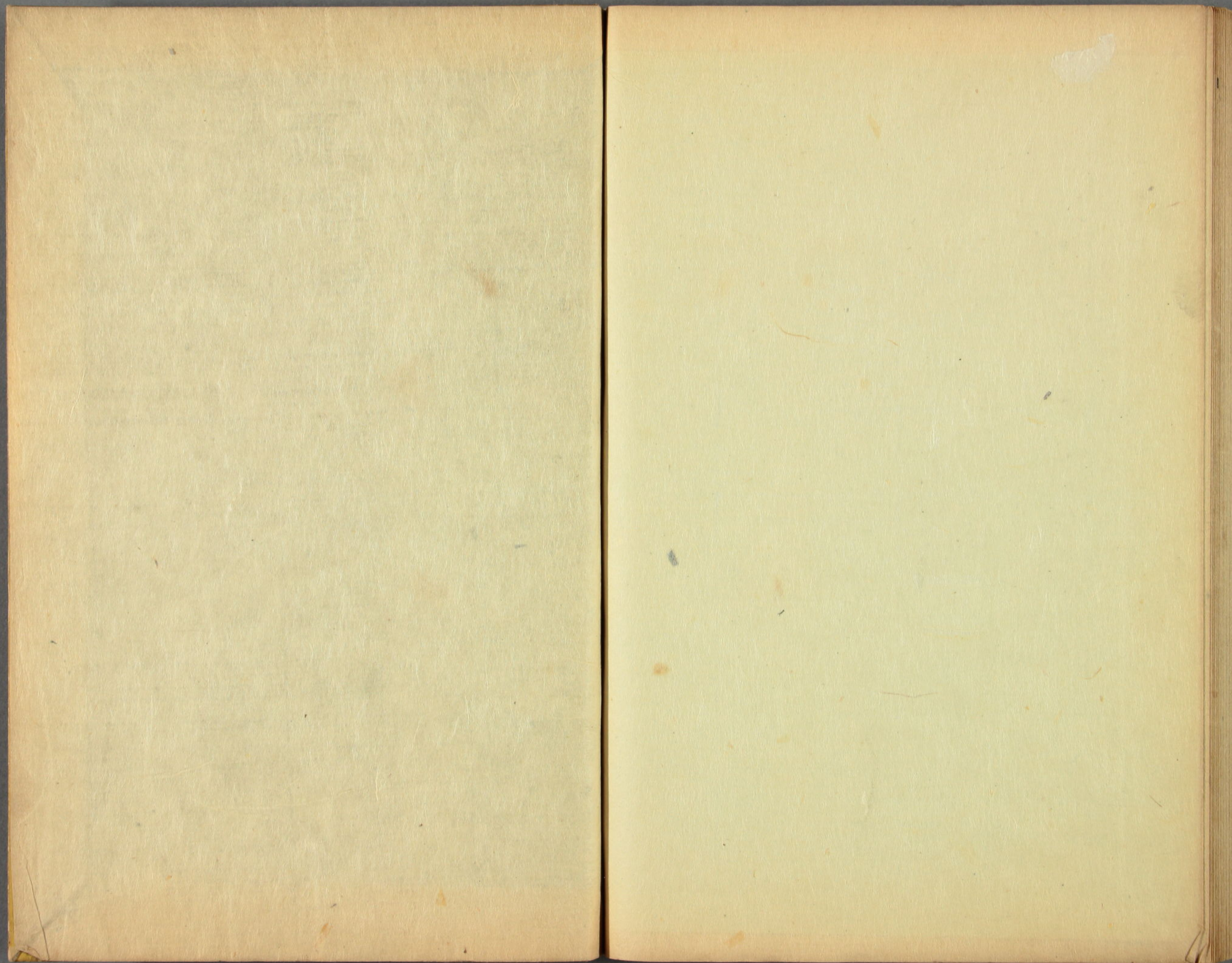
るるそめ時のよるるを理る

蕉門の附意をけりる志るは只此心萬物一体
なるの理を得るのよるる作を立名浅くのむ
事足私己のいま忘れうなき故をへ

詩歌をよむ心得

さうさう詩とちるや姿とさうさうねむや
けひやうさうさうのうはるるのさ

閑寂を文字のうへへ尋ねる拙く風雅心
則閑寂



紅くろく庵

其書